

戦後も進んだ開拓



湿地(☒)が多い、昭和21年(1946) 発行の地形図による十勝川下流部。 農地(□)が多い、昭和58年(1983) 発行の地形図による十勝川下流部。



戦後に開拓が進んだ、上の地図と同じ十勝川下流部。平成17年(2005)。



排水路(手前)などによって、かつての湿地が畑になった。(浦幌町字愛牛)

農地改革・農地解放の功罪

池田農場(池田町)などのように、太平洋戦争より前に農地解放がおこなわれ、小作者が農地を手にした場合もあります。

池田農場では、昭和16年(1941)に、様舞・清見などの農地が67戸の農民に解放されていました(p165)。その際、清見ヶ丘公園の寄付もおこなわれています。

こうした戦前・戦中・戦後の農地解放や農地改革は、多くの小作者にとっての夢であった自作農を実現し、地域に生きる農民としての活力を生み出しました。

一方、多くのアイヌの人たちは、「旧土人保護法」などで得た土地を和人農民に貸していました。彼らは、農地改革によって、この土地を失ってしまうことになったのです。(p149)

太平洋戦争最後の年の昭和20年(1945)、本土空襲が激しくなります。家を焼かれ、仕事を失った人たちが、「帰農者」として北海道へ入植、十勝にも移住しました。

戦後には、日本全体に食料が不足したため、食料を増産する必要が生まれます。一方、中国東北部(旧満州)やサハリン(旧樺太)を開拓していた人たちは、敗戦によって日本にもどり、生きていく場所を探していました。こうした「引き揚げ者」の人たちなども、戦後開拓者として十勝に移住してきました。(太平洋戦争 p197)

また、昭和22年(1947)には、農地改革がおこなわれました。

これにより、地主が自分で耕作しないで農民(小作者)に土地を貸し、小作料として生産物や代金を受け取っていた場合(小作制)、農地が国に買い上げられ、直接耕作していた人たちに安くあたえられることになりました。

(地図は国土地理院刊行の1/5万地形図(浦幌)を使用・着色)

失敗も多かったが新しい農地が広がった

新しい入植者には、いい土地があたらないことも多く、また、とくに北国の農業になれていない人にとっては、困難の連続で、うまくいかないこともよくありました。

しかし、一方で、これまで開拓されていなかった土地が、新たに農地となることで、十勝の農業は活気づきました。

例えば、十勝川下流部の幌岡(豊頃町)、愛牛・豊北(浦幌町)などには湿地帯が多かったのですが、開拓者の努力や排水路整備など国による農地開発により、今では畑や牧草地が広がっています。



池田町の清見ヶ丘公園。池田農場の農地解放とともに、池田町に寄付された。

2 小作者(こさくしゃ)・地域に生きる(ちいきにいきる)・活力(かつりよく)：土地を持つ農民(自作者)になることは、地主に苦しみられない代わりに、すべての結果が自分の責任となる。小作者にはこの責任感が生まれにくい場合があった。また、小作

者は農場を移り変わることもよくあったため、地域との関係がうすかった。農地解放や農地改革には、小作者だった人たちに、やる気と責任感、地域の一員としての自覚を与えることによって、農業生産性を上げようとする意図があった。

国際理解
地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん